

◎ 前回の宿題

○ 秋さらば（四六四番歌）

・ 原文…：秋去者

◎ 万葉集における「さる」の用例

A・季節が来る

【春されば】春になると 27例

○ 春さればまづ咲くやどの梅の花独り見つつや春日暮らさむ（五・八一八）

「波流佐礼婆」山上憶良

ほかに「波流佐礼婆」2、「波流左礼婆」1、「春佐礼播」1、「春佐礼婆」1、

「春去婆」1、「春去者」14、「春避者」1、「春之在者」3、「春去」2

【春さり来れば】春になると 7例

○ 冬こもり 春さり来れば 鳴かずありし 鳥も来鳴きぬく（一・一六）

「春去来者」額田王

ほかに「春去来者」5、「春去来之」1

【春さりぬれば】春になると 1例

○ うち靡く 春さりぬれば 山辺には 花咲きををり 川瀬には 鮎子さ走りく

（三・四七五）「春去奴礼婆」大伴家持

【春さらば】春になったら 5例

○ 春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つるかも（五・八三五）

「波流佐良婆」高氏義通

ほかに「波流佐良婆」2、「春去者」1、「春去」1

【春さりゆくと】春になってくると 1例

○ うち靡く 春さりゆくと 山の上に 霞たなびく 高円に 鶯鳴きぬく

（六・九四八）「春去往跡」

【春さりゆかば】春になったら 1例

○冬こもり 春さりゆかば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 龍田道の 岡辺の道に 丹つ  
つじの にほはむ時のく(六・九七一)「春去行者」高橋虫麻呂

【春さりにけり】春が来たことだ 1例

○風交り雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さりにけり(一〇・一八三六)  
「春去尔来」

【春さりくらし】春が来たらしい 1例

○うち靡く春さり来らし山の際の遠き木末の咲きゆく見れば(一〇・一八六五)  
「春避来之」

【春さりて】春になって 1例

○春さりて 野辺を廻れば 秋さりて 山辺を行けば(一六・三七九一)  
「春避而」

【秋されば】秋になると 10例

○秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ(一〇・二二九四)  
「秋去者」

ほかに「安伎左礼婆」1、「安伎佐礼婆」1、「秋左礼婆」、  
「秋去者」5

【秋さらば】秋になったら 8例

○秋さらば見つつ偲へと妹が植ゑし屋前の石竹花咲きにけるかも(三・四六四)  
「秋去者」大伴家持

ほかに「安伎左良婆」1、「安吉佐良婆」1、「安伎佐良婆」1、「秋佐良婆」1、  
「秋去者」3

【秋さりて】秋になって 1例

○春さりて 野辺を廻れば 秋さりて 山辺を行けば(一六・三七九一)  
「秋僻而」

【秋さり衣】秋になって初めて着る衣 1例

○織女の五百機立てて織る布の秋さり衣誰れか取り見む(一〇・二〇三四)「秋去衣」

B・時が来る

【朝されば】朝になると 1例

○朝されば 妹が手にまく 鏡なす 御津の浜びに 大船に 真楫しじ貫き 韓国に  
渡り行かむとく(一五・三六二七) 「安佐散礼婆」遣新羅使人

【夕されば】夕方になると 30例

○夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐ねにけらしも(八・一五一)

「暮去者」舒明天皇

ほかに「由布佐礼婆」6、「由布左礼婆」2、「暮左礼婆」1、「夕去者」6、

「暮去者」12、「夕去」2

【夕さり来れば】夕方になると 2例

○く玉限る 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に 旗すすき 小竹を押しなべ 草  
枕 旅宿りせず いにしへ思ひて(一・四五) 「夕去来者」柿本人麻呂  
ほかに「夕去来者」1

【夕さらば】夕方になったら 3例

○夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しくありけれ(一二・二九二二)

「夕去者」

ほかに「暮去者」2

【明けされば】夜が明けると 3例

○あさりすと磯に棲む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも(七・一一九八) 「暁去者」  
ほかに「安気左礼婆」1、「明去者」1

【明けさりにけり】夜が明けてしまった 1例

○相見らく飽き足らねどもいなための明けさりにけり舟出せむ妻(一〇・二〇二二)

「明去来理」柿本人麻呂歌集(非)

【夜さり来れば】夜がやってくる 1例

○ぬばたまの夜さり来れば卷向の川音高しもあらしかも疾き(七・一一〇一)

「夜去来者」柿本人麻呂歌集(非)

C. (打消を伴って) 欠けることなく

【朝去らず】 毎朝 5例

○鹿背の山木立を茂み朝さらす来鳴き響もす鶯の声(六・一〇五七)「朝不去」

田辺福麻呂歌集

ほかに「安佐左良受」2、「朝不離」2

【夕去らず】 毎夕 3例

○今日もかも明日香の川の夕さらすかはづ鳴く瀬のさやけくあるらむ(三・三五六)

「夕不離」 上古麻呂

ほかに「夕不去」1、「暮不去」1

【宵去らず】 毎晩 2例

○白雲の五百重に隠り遠くとも宵さらす見む妹があたりは(一〇・二〇二六)

「夜不去」 柿本人麻呂歌集(非)

ほかに「初夜不去」1

【岩もと去らず】 全ての岩蔭に 1例

○み吉野の岩もとさらす鳴くかはづうべも鳴きけり川をさやけみ(一〇・二一六一)

「石本不避」

D. (打消を伴って) 離れず

【川淀去らず】 川淀を離れず 1例

○明日香河川淀さらす立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに(三・三二五)

「川余藤不去」 山部赤人

【海辺常去らず】 海辺を常に離れず 1例

○須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我れはするかも(一七・三九三二)

「海辺都祢佐良受」 平群女郎

【み山を去らぬ】 お山を離れない 1例

○夕さればみ山を去らぬ布雲のあぜか絶えむと言ひし子ろはも(一四・三五二三)

「美夜麻乎左良奴」 東歌(未勘国)

【朝廷去らずて】 朝廷を去らずに 1例

○万世にいましたまひて天の下奏したまはね朝廷去らずて（五・八七九）

「美加度佐良受互」 山上憶良

【面影去らず】 面影が消えることなく 1例

○里遠み恋わびにけりまそ鏡面影去らず夢に見えこそ（一一・二六三四） 「面影不去」

【床の辺去らず】 床のあたりを離れず 3例

○今よりは恋ふとも妹に逢はめやも床の辺去らず夢に見えこそ（一二・二九五七）

「床辺不離」

ほかに「登許能辺佐良受」 1、「床重不去」 1

【枕去らずて】 枕辺を離れず 1例

○直に逢はずあらくも多く敷栲の枕去らずて夢にし見えむ（五・八〇九）

「麻久良佐良受提」

【ねどなさりそね】 この寝床にいつもいてくれ 1例

○安達太良の嶺に伏す鹿猪のありつつも我れは至らむ寝処な去りそね

（一二四・三四二八） 「柵度奈佐利曾柵」 東歌（陸奥）

【枕片さる】 あなたの枕が床の一方に寄っている 1例

○ここだくも思ひけめかも敷栲の枕片さる夢に見え来し（四・六三三） 「枕片去」 娘子

【夜床片去り】 夜床の片方を開けてやすみ 1例

○くはしきよし 妻の命の 衣手の 別れし時よ ぬばたまの 夜床片さり 朝寝髪

搔きも梳らず 出でて来し 月日数みつつ（二八・四一〇一）

「夜床加多左里」 大伴家持

◎万葉集における「なり」の用例

I、声や音が聞える 5 3 例

A、動物の鳴き声 3 8 例

a、鳥の声 28

雁（かり） (6)

ほととぎす (6)

鶴（たづ） (5)

鶏（かけ） (4)

呼子鳥 (2)

千鳥 (2)

鴨 (2)

鶯 (1)

b、その他の動物の声 10

鹿 (6)

河蝦（かはず） (3)

ひぐらし (1)

B、物音 1 5 例

a、道具の音 12

楫（かぢ） (8)

弭（はず） (2)

鞆（とも） (1)

鐘 (1)

b、水の音 2

c、その他の音 1

廬 (1)

II、伝え聞く 5 例

A、「動物の鳴き声」の例

a、「鳥の声」の例

- ・わが屋戸に鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴く**なり**国へかも行く（二一三〇）雁
- ・かき霧らし雨の降る夜を霍公鳥鳴きて行く**なり**あはれその鳥（一七五六）

ほととぎす

- ・ぬばたまの夜は明けぬらし多麻の浦に求食する鶴鳴き渡る**なり**（三五九八）鶴
- ・暁と鶏は鳴く**なり**よしゑやし独り寝る夜は明けば明けぬとも（二八〇〇）鶏
- ・春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行く**なる**は誰呼子鳥（一八二七）呼子鳥
- ・佐保川に鳴く**なる**千鳥何しかも川原を偲ひいや川のぼる（一二五一）千鳥
- ・吉野なる夏実の河の川淀に鴨そ鳴く**なる**山陰にして（三七五）鴨
- ・春されば木末隠れて鶯そ鳴きて去ぬ**なる**梅が下枝に（八二七）鶯

b、「その他の動物の声」の例

- ・雁来れば萩は散りぬとき男鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり(二一四四)鹿
- ・夕さらず河蝦鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良しも(二二二二)河蝦
- ・萩の花咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに秋の風吹く(二二三一)

ひぐらし

B、「物音」の例

a、「道具の音」の例

- ・楫の音そほのかにすなる海未通女沖つ藻刈りに舟出すらしも(一一五二)楫
- ・く御執らしの 梓の弓の 金弭の 音すなりく(三)弭
- ・ますらをの鞆の音すなりものものふの大臣楯立つらしも(七六)鞆
- ・皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも(六〇七)鐘

b、「水の音」の例

- ・天の河浮津の波音騒くなりわが待つ君し舟出すらしも(一五二九)水の音

c、「その他の音」

- ・秋田刈る廬揺くなり白露し置く穂田なしと告げに来ぬらし(二一七六)廬

II、「伝え聞く」の例

- ・汝をと我を人そ離くなるいで我が君人の中言聞きこすなゆめ(六六〇)
- (あなたと私との仲を人が引き裂こうとしているそうです。どうぞわが君よ、人の中傷などに耳を貸さないで下さい、決して。)

- ・荒磯辺に着きて漕がさね杏人の浜を過ぐれば恋しくありなり(一六八九)
- (荒磯の岸辺に沿って漕いでください。杏人の浜を素通りすると恋しくてたまらなくなるという話ですから。)

- ・く娘子らは 思ひ乱れて 君待つと うら恋すなりく(三九七三)

(おとめらは心乱れて、あなたのお出ましを心待ちに待ち焦がれているそうです。)

- ・春草を馬咋山ゆ越え来なる雁の使は宿り過ぐなり(一七〇八)

(春草を馬が食う、その咋山を越えて来るという雁の使は、この旅寝の小屋を通り過ぎて行くらしい。)